

●英語の考へもの

- (一) 一瞬間には二つ顯はれ、一秒には一つ顯はれ一時間には一つも顯はれない英語の文字は何？
- (二) 二綴の英語で、次の綴は始の綴を日本語に譯して發音して居るのは、何？

●一口話し

田舎者が 馬を引張って、品川の方からやっ
て来て東京へ這入りかゝった所で、急に馬の顔に
厚布を引つかぶせると、馬は目が見えないから、
一歩も進まない、夫を無理に連れ様として騒いで
居ると、巡查さんが来て

巡「コラ〜何故馬の顔を隠して居る？」

田舎、へい〜江戸ではハ一生馬の眼を抜くといふ

こツてがすから」

家庭



子どもの讀み物

濱

子

私の友の一人は此頃こらいふ事を語りました。

私は小さい時から物を讀む事が好で、十才頃か
ら新聞の拾ひ讀みをはじめ、高等小學時代には
新聞狂雜誌狂など、家内であだ名され、新聞雜
誌は元より小説でも何でもかでも手當り次第に
讀みちらしました。兄が小説好で方々から、小
説本を借りて來るものですから、私もよほど澤

山、時には夜がふけても、只一人で讀む位に小説にふけりました。ですから早くから世事情には割合に詳しかつたのです。又新聞は隅から隅まで、廣告も一字残さず讀むといふ風でしたから、其年齢としては世才に長じ、世の中の出來事に對して興味を有て居りました。又雜誌は其頃はまだ今のやうに幼年世界とか、少女界とか、適當なものがなくて僅に博文館の「日本の少年」があるばかりでしたが、之を非常に愛讀し、又東洋學藝雜誌とか何とか六かしいものまでひやみに讀みまして、多方面に種々の事を知りました。

つまり、私の兒童期には、非常に多讀をしたもので、其爲に讀書力は發達し、想像力が強くなり、自分の思想を文字で表はす事が非常に好に

なりました。けれども、多讀に伴ふ粗讀の弊を受けて、よく考へなければ分らぬやうな處はサツサとぬかし、又は分らぬなりに捨ておきました。たとへば雜誌の中でも、理科に關した處などは面倒くさくて、大抵は讀まぬといふ風に、まるで文學的に傾きまして、此頃は學校の教科書にまで及ぼして居ました。そうして、一寸讀んで感情を惹き起すやうなもの、強く情を刺戟するやうなものばかりを好みましたから、感情はますます強くなり、年不相應に種々の方面に情を起すやうになり、そうして意志は此強い情に伴ふだけ、又此情を支配するだけに發達する事ができなかつたのですから、だん／＼情に由て支配される人間になりました。

そうかと思へば、或事柄に對しては思の外、冷淡で、たとへば人の非常に悲むやうな場合にでも、そう悲しくなく、人が大變殘酷に感ずる事をそれほどにも感じなかつたり、つまり或情に對してはそう感じなくなりました。之は全くあまり情を刺戟しすぎた結果、強く感ずるといふ點を通り越してしまつて、却て鈍つたものであると思ひます。

此私の偏性は幼時からの讀書の材料、讀み方が儘に一原因であると思ひます。

又一人の友は私に語りました。

私は一人前の大人になつて、見界を廣める爲に求めていろ／＼の書を読ひやうになるまで、學校時代には殆ど教科書以外に何も讀みませんでした。

自家には手近に小説も随分ありましたが、讀む事が嫌で、手にも觸れず、學校以外では只祖父から教へられる漢書を讀む位の事でした。

此通り寡く讀む人でしたけれども、教科書でも何でも讀むとなれば非常に精讀しました。分らぬなりに捨て、かくといふやうな事は決してしません。其代りに多種類の物を讀まないから、知識は狭く、世事に疎く、人情を解せず、想像力が乏しく、凡て物を書くといふ事が嫌で、不得手で理窟ツボイマジメなものをよく考へながら讀む事が好で、凡て心のはたらきが、冷靜で、情に支配されるといふやうな事は少しもなく、頑固と言はれる位に意志の強い人間でした。

右の二人即ち讀書の材料の種類、分量、其讀み方に於て非常に違て居る二人の人の特性がいかにも

違て居るといふ事は注意すべき事ではありませんか。併し此二人の傾は單に讀書の點からばかり來たものではなく、各本來の性質に由る事は無論であります。ところが、此二人が年が長じて讀み物に對する方針が變るに從て、自分の傾の變る事を覺えるといふ事をも、各語りて居ましたが、これは讀書といふ事に付て面白い事實であると思ひます。

實に讀書は廣い意味の交際であつて、丁度人と交はるやうなもので、之から受ける感化はなかなか大きなものであります。ところが此有益な讀書でも、其材料の撰擇や、讀み方に由ては却て害を來す事になります。ですから子どもの讀書、之は中々考へるべき問題であります。

絶對的に讀んでわるいものは勿論、子どもには

まだ讀させてもだめであるとか、讀ませられぬとかいふものは何れも子どもの讀書の材料とする事ができませぬ。又走り讀みに讀み流すとか、拾ひ讀みをするとかいふ習慣は、書は熟讀すべきものといふ方面から考へると避けなければなりません。尤も精讀する力と良習慣を有て居る大人でも、時に臨んである必要の爲に急いで讀むといふ場合はあるにしても、それは變則なのであつて、書は當然熟讀玩味すべきものでありますから、子どものうちから粗末に讀むといふ習慣をつけてはなりません。ところがよく注意しないと、多讀と粗讀とが大人にも伴ふごとく、子どもでも此弊に陥り易いものです。そうして多く粗末に讀むよりは、寡く精密に讀む方が遙に利益の多い場合が多いのですから、書に讀まれぬやうに、人が

即ち其子どもが眞に書を讀んで自分の知識と同化するやうに其讀んだだけのものは、其子どもものになるやうに注意しなければなりません。

ところが子どもは元來大人ほどのわかまへのないもの、意志の十分發達して居らぬものですから子ども自身が讀み物として、良い材料を常に見出し適當な讀み方をするといふ事は六かしい事でありませす。もしも放任しておきましたならば、好きな種類の物ばかり讀んで、ますます性質知識が傾き、又は粗末な讀み方をしたり、誤解をしたりして居るかも知れませせん。ですから、家庭（學校でも注意はするでせうが教科書以外の物を讀む時間は多く家庭にありませす）では常に子どもが何をどういふ風に讀んで居るかといふ事を注意するのは元より、進で良い材料を供し、有益な讀み方をするや

うに導き、子どもが讀書の眞の利益を得、眞の愉快を感じ、將來にまで爲になるやうにする事が必要であると思ひます。自家の兒童、少年、少女がどういふ友とどんなに交はつて居るかといふ事を深く注意する家庭では、其通に讀み物に對しても注意すべき筈であります。

今昔いろは料理

石井泰次郎

(や)

山吹餅の拵方

つきかへしの餅を、砂糖の煮とかしてみつにつめたるにて、柔らかに丸く取上て、玉子を湯煮したるを黄味と白味と分たるにて、黄味のみを馬尾篩にて漉して餅の上にかくべし、漉す時は、餅を馬